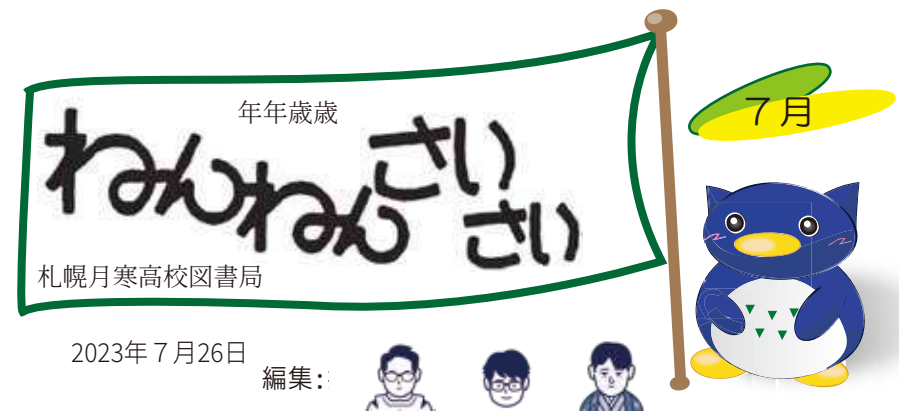




花鳥風月

月高祭が終わり、いよいよ待ちに待った夏休みですね！皆さん、この季節になると暑さをどう凌ぐか悩みますよね。そこで僕は肝試しをおすすめします。夏に怖い場所を回ると原理はわかりませんが涼しくなり、勇気がつきますよね。つまりモチモチになるチャンスです！このチャンスを逃すわけにはいきません！ところでこの肝試しという文化は、いつからあるのでしょうか。時代は平安時代後期に遡ります。「今宵こそいとむつかしげなる夜なめれ。かく人がちなるだに、気色おぼゆ。まして、もの離れたる所などいかならむ。さあらむ所に、一人往なむや。」これは『大鏡』で天皇が気味の悪い夜に肝試しに行ける者はいるかと家来たちに言っている場面です。多くの家来は行けないと言いましたが、その中で藤原道長だけは肝試しを恐れることなく終え、後の世の者に驚かれ、勇敢で多くの人に好かれる人物となりました。まさしく肝試しの由来となる物語ですね。あなたも今年は肝試しで涼しくなりながら勇気を試し、モチモチになりましょう！（ ）



今回は、図書館に新たに設置されたコーナーについて紹介します。



夏（ナツホン）のコーナー

夏と聞いて皆さんは何を思い浮かべますか？ 夏を最大限に楽しみたい！そう思っている人も扇風機やエアコンの前でアイスを食べいて、気づいたら何もしないまま夏が終わっていたという人も多いのではないのでしょうか。また、外で遊べるからという夏肯定派と夏は暑いから嫌だという夏否定派が暑苦しい対立をして、体感温度が上昇していませんか？ そんなみなさんのために、夏をもっと楽しめる本や読んでいだけで涼しくなれる本を紹介すべく、夏を最大限に楽しめるコーナーを作りました。

涼しさを求めて図書館に行くのどーしよーかん？ どうですか？ 涼しくなれましたか？ もっと涼しくなりたい方は、ぜひ図書館に来てみてください。（ ）



薬丸岳著
幻冬舎



R・J・パラシオ著
中井はるの訳
ぼるぷ出版

この本は、スクランブル交差点無差別通り魔事件の被害にあい、心身に重症を負った被害者の女性が、恋人とともに、家庭環境が悪く、幼い頃から虐待を受けていた事件の犯人と法廷で戦い、女性を助けて亡くなった被害者男性の「約束は守った...伝えてほしい...」という最後のメッセージを伝える相手を、事件のトラウマから立ち直りながら探し回るという物語です。

私は、被害と戦っている被害者が報われる世界になって欲しいとこの本を読んで思いました。

皆さんはどんな理由があるうと「罪の境界」を越えてはいけなと思いますか？

殺人には無期懲役、死刑、どちらが妥当だと思いますか？それらを考えさせられる本です。（ ）

『Wonder Wander』

もし、あなたが人に気味悪がられる顔だったらどうしますか？本書は生まれつき異形な顔のオーガストことオギーの視点を中心に、あるときはオギーの姉、あるときは学校の友達、と多くの人物の視点で学校を舞台に繰り広げられる物語です。一つのシーンでも人物によって解釈が違い、読んで面白いです。

教訓も多くあります。私は、この物語から人の強さとは見た目ではなく、心の強さであり、その心を成長させてくれるのは自分を理解してくれる友達なのだという教訓を得ました。オギーと共に成長できる一冊、ぜひ読んでみてください。（ ）



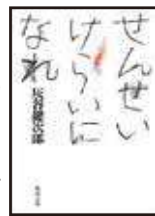
このコーナーでは、局員が今までに読んだ本を評価とともに紹介していきます。

本書は詩についての本です。あなたは詩について興味はありますか？すいません。無駄な質問でした。僕は別に興味のないジャンルの本を読んだっていいと思います。

この本は詩集 兼 作詩の指南書といった内容の一冊です。テーマごとにたくさんの詩が、作者の考える作詩や鑑賞のポイントと共に穏やかな語り口で語られていきます。

僕のおすすめポイントは、収録されているすべての詩を小学生が書いているところです。そのため、序盤は「おしっこ」という単語の登場頻度が高めだったりします。小学生ならではの視点と言葉によって書かれた詩の数々は、高校生の私達に新鮮な刺激をくれます。

「詩の世界のガイドブック」といった印象の本書。夏休みの旅行先は詩の世界に決まり！ この一冊を片手に詩の世界を探検しよう！（ ）



『せんせいなれういせい』
灰谷健次郎 著
KADOKAWA/角川文庫

読みやすさ

愉快度

文章の漢字率



中にびっしりとあんこが詰まった月寒あんぱん。月寒の、ひいては北海道の銘菓だ。古くから変わらないその味は、今なおお客さんのお腹を、そして心を満たしている。今回は月寒あんぱんを作っている株式会社ほんまさんの伊藤 功さんにインタビューを受けていただき、月寒あんぱんやその歴史について沢山のことを聞かせていただいた。月寒の歴史と共に歩んだ月寒あんぱんの世界を今覗きに行こう。

月寒あんぱん

月寒あんぱんは小麦粉などからなる生地であんこを包んだあんこ菓子。現在は機械で作られているが、その日の気温や湿度によって職人さんが材料の割合を微妙に変えている。膨らんだ月寒あんぱんが縮むことで表面には独特のシワが刻まれ、出荷するまでの間に皮が水分を吸って月寒あんぱんの少ししっとりとした食感が生まれる。そして、月寒あんぱんは2～3年経ってもカビない特殊なパッケージによって守られ、みなさんの手に届くのだ。

僕たちも月寒あんぱんを食べたが、薄い皮の中にたっぷりと北海道産小豆のあんこが詰まっていてとても美味しかった。長い歴史の中で色々な味が生まれ、現在は通常のもので5種類の味が楽しめるようになっている。しかし、つぶあんは無い。実は、株式会社ほんまさんの商品の殆どにはこしあんが使われていて、つぶあんの商品は贈答品として作られる「寒月」という月寒あんぱんのみ。インタビューさせていただいた伊藤さんによると、北海道ではこしあんを使う家が多かったことが原因とのこと。また、こしあんを作る手間がかかるので、贈り物などであんこを使うときはこしあんを用いることが多かったことも関係があるかもしれない。月高まんじゅうに紅白餅。月高でも株式会社ほんまさんの商品を味わうことができる。食べる機会があったときには、ぜひ味わって食べてほしい。（ ）



焼きたての月寒あんぱん



株式会社ほんまさんの社員さんにインタビュー中



あんぱん道路工事中

あんぱんの艱難

明治7年、月寒あんぱんの第一歩が踏み出された。陸軍に菓子を売っていた大沼甚三郎が東京・木村屋の「桜あんぱん」を噂で聞き、自分なりの方法で作ることを試みた。そうして出来上がったのが、月餅のようなまんじゅう。月寒あんぱんの濫觴である。

明治39年、その製法を指南された1人、株式会社ほんま創業者、本間与三郎は、月寒村にて月寒あんぱんの

販売を始めた。

かつて月寒には軍事拠点が置かれており、故に軍隊との関係も深かった。アンパン道路の歴史を見れば、それがよく分かる。平岸と月寒を繋ぐ道路だ。明治44年、陸軍第25連隊と住民が共同で造ったものだが、その際毎日5個のあんぱんが提供されたことが名前の由来になっている。

月寒であんぱんを製造する店は7店舗あったが、その存続にあたっての苦難は訪れた。太平洋戦争である。月寒あんぱんの生産設備の殆どを失い、昭和21年に「元祖月寒あんぱん」の製造メーカーとして再開したのは、今の「株式会社ほんま」のみであった。

現在令和5年。月寒あんぱんは117年の年月を経てもなお、愛され続けている。（ ）

伊藤功さん、インタビューを受けてくださり、ありがとうございます。この場を借りてお礼申し上げます。



『ゴールデンカムイ 20』
野田サトル著/
集英社

漫画「ゴールデンカムイ」にも月寒あんぱんが登場している。